くまもと障害者労働センター通信

ウィズ ～ともに～

WITH

復刊 第87号

2026.07.28

since1985

おれんじ村

発行：社会福祉法人 くまもと障害者労働センター 〒861-8039 熊本市東区長嶺南1-5-40

TEL:096-382-0861 FAX：096-285-7755 http://1985orange.com

令和8年熊本地震 揺れの中で見つめ直した「共に生きる」ということ

～激震を越えて、私たちは今日もお弁当を届け、心を込めてクッキーを焼き続けます～

1 突然の激震と、いつものおれんじ村の仲間たち

2026年7月28日、16時27分。突如として強烈な揺れがおれんじ村を襲いました。10年前の熊本地震の記憶が一瞬で蘇り、体感的には永遠にも思える激しい振動の中で、僕の頭には様々な想いが駆け巡っていました。「家族は無事か」「子どもたちは大丈夫か」「おれんじ村の避難誘導はどうする」「もうこのまま死んでしまうのではないか」と恐怖で胸が締め付けられるほどの数十秒間でした。

揺れが収まった直後から、電話やLINEの通知が鳴り止みません。しかし、自分の家族への連絡を後回しにし、まずはおれんじ村にいるみんなの安全確保に走りました。駐車場へ全員を誘導すると、そこにはいつものおれんじ村の風景がありました。地震の興奮からテンションが上がってしゃべり続ける人、何が起きたのか分からない様子でマイペースを保つ人、なかなか避難しようとしない人……。

大きな混乱と恐怖の中でありながら、村民のいつもと変わらないマイペースな姿に、僕はどこか奇妙な安堵感を覚えていました。

揺れが収まり、地震の興奮も冷め、猛暑のアスファルトの駐車場から室内へみんなを戻した後、一人暮らしのメンバーの安否確認へ向かいました。一人で夜を過ごすのが不安な村民2人におれんじ村へ避難して泊まってもらい、重度障害で子育て中のご家庭にはスタッフが付き添う体制を整えました。

2「明日も休まない」―― 守りたかった日常と、地域とのつながり

おれんじ村の建物やインフラの状況を確認した僕たちが決めたのは、「明日も休まず営業する」ということでした。こんな時だからこそ休みたいという本音もありました。しかし、一人暮らしの村民が多く、休業にすれば家で一人、不安に押しつぶされてしまいます。そして何より、

僕たちが毎日作るお弁当を待ってくださっている地域の方々、お客様がいます。「いつも通りお弁当を作ろう」。それが僕たちの出した答えでした。 翌朝、避難所に泊まった僕の身体はバッキバキに痛んでいましたが、「地震後も頑張って仕事をしている人たちに、おいしいお弁当をいつも通り届けよう。おれんじ村も元気に頑張っている姿を見てもらおう」と声を掛け合い、営業を開始しました。想像通り注文は 100 食ほど少なかったものの、余ったお弁当を持って県庁や市役所へ売りに行くと、多くの方が温かい言葉とともに買い求めてくださいました。「お弁当のメッセージで元気が出るよ」。その一言に、救われたのは僕たちの方でした。

しかし、一歩外へ出れば言葉を失う光景が広がっています。仕事の合間に生まれ故郷の氷川町に向かうと、倒壊した建物、火災で焼け落ちた家屋、凸凹に狂った道路……幼い頃の思い出が詰まった町が大きく姿を変えていました。足の踏み場もない実家の玄関で、疲弊した顔で団扇を仰ぐ両親を説得し、半ば強引に自分の家に避難させました。

3強がりを捨てて知った「本当のしんどさ」と、支え合いの原点

実は、10 年前の熊本地震の後、僕は周りにこう言い続けていました。「次、地震がきたら、もっと助成金をもらったり、お菓子を売って儲けてみせる」と。

けれど、今回の地震で思い知らされたのです。あの言葉は「もう二度と大きな地震なんて来ない」と高をくくっていたからこそ言えた、ただの強がりだったのだと。

避難所の運営、家族の心配、自宅での親族の同居による摩擦、そして連日の疲れ……。4 日目を迎える頃には、私の心も体も限界を迎えていました。「本当にしんどい。もう疲れた」。それが偽らざる本音でした。どんなに立派な理念を掲げていても、僕自身も一人の被災者であり、弱さを持った人間です。

だからこそ、一人で抱え込むのではなく、みんなで支え合う「共に生きる」ことの本当の意味が、骨身にしみて理解できたのです。おれんじ村は、完璧な人間が集まる場所ではありません。不安になる人、マイペースな人、支える人、支えられる人が混ざり合いながら、お互いの弱さを認め合って生きていく場所なのだと。

4クッキーの一粒に込める想い ― 共に生きる未来へ

おれんじ村では「商いでノーマライゼーション」を掲げ、障害のある人もない人も地域の中で誇りを持って働き、生きていくための仕事づくりを続けてきました。お弁当作りやカフェ、焼き菓子（クッキー）の製造は、単なる作業ではありません。おれんじ村のみんなが社会とつながり、自分らしく生きるための大切な誇りです。震災の影響でカフェや焼き菓子の製造ラインは一時的に止まりましたが、僕たちは再び、香ばしく優しい味わいのクッキーを全国の皆様にお届けするため、おれんじ村の村民は共に一歩ずつ前を向いています。 同封いたしましたクッキーの注文用紙は、単なる商品の案内ではありません。おれんじ村の仲間たちが一枚一枚、心を込めて焼き上げるクッキーを通じて、全国のみなさまと僕たちが「つながる」ための大切な絆です。みなさまがこのクッキーを手に取り、食べてくださることが、おれんじ村の日常を取り戻し、笑顔で働き続けるための大きな支えとなります。どうか、熊本のでっかい地震にも負けず、懸命に前を向いて生きるおれんじ村を、クッキーのご注文という形で温かく応援していただけないでしょうか。「当たり前の日常」がいかに尊いかを知った今だからこそ、僕たちは皆様との温かい繋がりを糧に、明日へ向かって歩んでまいります。どうか温かいご支援を、よろしくお願いします。

編集後記

こんにちは。10年前の4月に熊本地震があり、その10年後の7月に震度7の大地震が熊本を襲いました。僕はちょうどトレペの配達中で、グラグラと来たので、車にしがみついていました。またあの記憶が思い出されました。災害はいつ起こるかわかりません。人と人との繋がりを大切にしながら、防災の意識を持ち続ける事が重要だと思います。

この震災に負けずおれんじ村一同力を合わせてこの震災を乗り越えて行きたいと思います。

IT部 E